

# 戦後高等学校古典学習指導の試行と軌跡

## —『枕草子』の学習指導の場合—

Historical Research on Classic Education in Postwar Senior  
Highschool Education in Japan

-In the Case of "Makuranososhi"-

渡 辺 春 美

### はじめに

本発表では、戦後の高等学校における『枕草子』の学習指導の試行と軌跡を把握し、『枕草子』学習指導の達成と課題とを明らかにすることを目的とする。『枕草子』の実践史に関して、「枕草子—中学校教材を中心に—」（注1）があるが、取り上げられているのは中学校の実践2編、高等学校1編の計3編で、極めて少ない。また、その内、高等学校の論考1編は、実践ではなく、実践案である。『枕草子』学習指導の試行と軌跡の把握は、ほとんどなされていないというのが現状である。ここに本研究の意義が認められる。

考察にあたっては、学習指導要領の改訂によって時期区分を行い、各時期の、報告内容の整った特色ある実践を中心に考察を行うことにする。

## I 研究の仮説

### 1 古典学習指導の展開に関する仮説

戦後古典学習指導は、規範としての古典観に基づく教師中心の学習指導から「関係概念」（注2）としての「古典」観に基づく学習者中心の学習指導の成立を追究して展開したと考えられる。これを総括的仮説とし、下位に次の仮説を掲げる。

- （1）学習者を学習主体として学習指導に定位することがなされた。
- （2）①学習者の興味・関心を育てるとともに、②学習者の実態に即した古典（古文）作品の教材化を行い、③古典教材と学習者の出会いを効果的にすることが実践された。
- （3）言語抵抗を少なくすることによって、あるいは言語抵抗を契機とすることによって教材と学習者との関係性を強めることがなされた。
- （4）学習者が主体的活動を行い、古典教材との関係性を強める場が設けられた。
- （5）主体的な学び手の育成のために、学びの方法を学ばせ、身につけさせる場が設けら

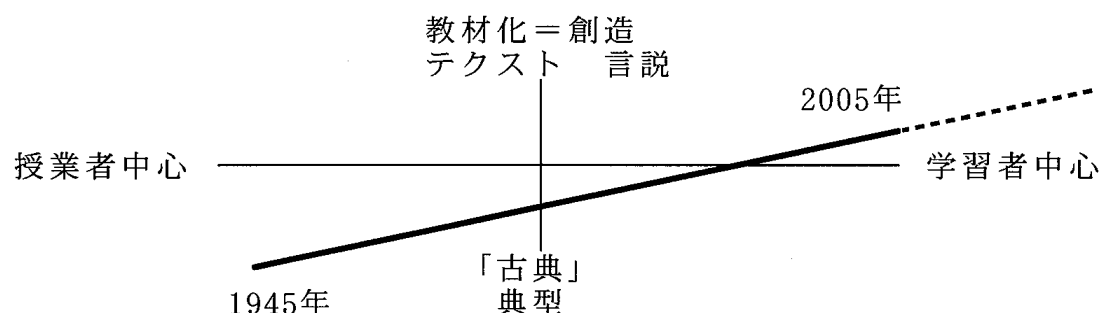
れた。

## 2 『枕草子』学習指導展開に関する仮説

「1」に加え、『枕草子』の随筆としての性格を反映して、想定される筆者の思想、人生観、ものの見方・感じ方・考え方に学習者を向き合わせ感想、意見を持たせる学習指導が行われた。

### 【展開のイメージ図】

戦後古典学習指導の展開に関する総括的仮説をイメージ化して表すと、次のようになる。



## II 『枕草子』の実践論文

次に、高等学校における『枕草子』学習指導に関する実践論文目録を掲げる。

	著 者	論文題目	掲載誌	発行所	年月日	種
1	池田恭仁子	生徒の季節感とそのとらえ方―『枕草子・春は曙の段』学習指導を通して―	国語教育研究 1	広島大学教育学部光葉会	196002	実
②	影山美知子	『枕草子』〈春はあけぼの〉教材の扱い方と実践授業の展開	宮崎健三・野地潤家・石井茂編著『〈教え方叢書〉古典の教え方(第二巻)日記・紀行・随筆編』	右文書院	197408	実
③	吉田 一恵	『枕草子』〈すさまじきもの〉教材の扱い方と実践授業の展開	宮崎健三・野地潤家・石井茂編著『〈教え方叢書〉古典の教え方(第二巻)日記・紀行・随筆編』	右文書院	197408	実
4	渡辺 英二	『枕草子』〈宮にはじめてまゐりたるころ〉教材の研究と実践授業の展開	宮崎健三・野地潤家・石井茂編著『〈教え方叢書〉古典の教え方(第二巻)日記・紀行・随筆編』	右文書院	197408	実
5	世羅 博昭	個々の生徒に即応した学習指導法を求めて―『枕草子』の学習指導における一つの試み―	「研究紀要」	広島県立安古市高等学校	197803	実
6	大崎 康子	「古典」を読む―『枕草子』の場合―	国語教育研究 26	広島大学教育学部光葉会	198011	実
7	稲益 俊男	枕草子・「大進生昌が家に」を読む―古典教育の課題と方法―	日本文学 30-2	日本文学協会	198102	実

⑧	青柳 好信	待遇表現の取り立て指導による「枕草子」第百二段の読解	月刊国語教育 2-8	東京法令出版	198211	非実
9	森本 真幸	季節の認識を啓く「春はあけぼの」	日本文学 33-8	日本文学協会	198408	実
10	牧本千雅子	単元「王朝人の愛と美のかたちを探る」—『枕草子』を中心に—	日本国語教育学会（倉澤栄吉）編著『ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開VI 高等学校編』	東洋館出版	199008	実
⑪	五十嵐一郎	特集・古典に親しむ（特集論文）古典に親しませる『枕草子』の授業	月刊国語教育研究 220	日本国語教育学会	199009	実
⑫	堀川喜美子	〈教材開発〉枕草子・「野分のまたの日こそ」	月刊国語教育 10-10	東京法令出版	199101	実
13	伊東 武雄	古典学習における短作文学習の試み—枕草子学習指導のばあい—	高校古典教育の考究	溪水社	199212	実
14	渡辺 春美	国語科授業活性化の試み—『枕草子』の学習指導の場合—	研究紀要（大下学園国語科教育研究会）	大下学園国語科教育研究会	199603	実
15	渡辺 春美	古典の授業活性化の試み—表現を軸とした『枕草子』の学習指導—	和泉紀要 24	大阪府立和泉高等学校	199810	実

（注 ○数字の論考は、本稿では取り扱わなかった。）

## Ⅱ 『枕草子』研究の動向

『枕草子』は、長く「天才」や「感性」や「直感」によって書かれたとするとらえ方が主流であったが、歴史社会学派の研究によって、中宮定子一族、中宮定子サロンの重大な影響と要求のもとに『枕草子』が執筆されたとする流れが、1960年代に決定づけられた。とりわけ秋山虔は、『枕草子』を自己の問題を抑圧し、上流貴紳と同化し、政治的歴史的な視点を捨象し、主体を喪失したひたすらな自己愛の文学と読もうとした。秋山虔は、上流貴族との一体化、自己の問題の棚上げという整理で『枕草子』を文学史の中から切り捨て、排除した。この影響で、『枕草子』研究は、以後長い空白・沈滞期を迎えることになる。1970年代から80年代にかけては、『枕草子』の文章・表現を、清少納言という個人の文体の問題としてではなく、「歌語り」や「をこ語り」の「語り」の粹取りから考えていこうとする動向が生じた。80年代以降、章段や章段群の表現的な特性や、史実との特徴的な「ずれ」の問題は、清少納言の資質や趣味の反映としてでなく、また、中関白家の「気風」や中宮定子の意図の反映でもなく、現実と拮抗し、独自の論理で現実を再構成していく『枕草子』の「方法」の問題であると受け止められるようになった。現在は、書かれた文章の層、配置、響き合いを読みとって行く研究へ、清少納言も中宮定子も意味の凝集点とせず、読者によって初めて意味が顕現するという立場の研究へ、重点を移してきている（注3）。

1960年代からの研究の経過と成果は、指導目標や教材観には、直接的には反映されていないといってよい。その理由を、次の二点に求めたい。一つは、研究の専門化、高度化である。1960年代以降の研究が、『枕草子』研究を専門としない教員の理解しうる範囲を超えているということである。二つには、一人の筆者としての清少納言を想定した『枕草子』の読みが、教員、生徒を問わず、読者に受け入れやすいものとしてあるということであろう。その場合の清少納言は、清少納言その人ではなく、語り手としての想定された筆者である。

### Ⅲ 『枕草子』学習指導実践事例の考察

#### 1 『枕草子』学習指導前史（1945～1969年）

戦後、1951（昭和26）年に「中学校・高等学校学習指導要領 国語科編（試案）」が出された。古典の目標が「文語や漢文がある程度まで読める」、「古典の現代的意義がわかる。」、「文語のきまりのあらましがわかる。」とされ、「古典はわれわれの生活とどんなつながりがあるか」という単元例が示されていた。1955（昭和30）年12月には、学習指導要領の改訂によって、新教育への批判を背景に、「読解力を豊かにし、特に鑑賞力や批判力を伸長させ、その読解の範囲も、現代文と並んで古文や漢文にまで拡充させる」とする能力主義の方向が打ち出された。ただ、漢文については、「やや高い程度の教養を養うため」とされた。古典教育の実践も、このような状況下、古典文法を重視し、読解力の育成をはかる訓話注釈中心の古典教育への傾斜を強めたと考えられる。1960年の学習指導要領の改訂によって、古典は、現代文と分けられ、「古典甲」・「古典乙Ⅰ」・「古典乙Ⅱ」が新設された。目標、指導事項も詳しく書かれ、古典教育の充実が図られた。

この時期は全体的に実践報告が少ないが、とりわけ『枕草子』の学習指導実践例は極めて少ない。『枕草子』研究の動向によれば、この時期、長い空白・沈滞期を迎えていた。このことが、『枕草子』学習指導の展開にも影響を与えたとも考えられる。

この時期の実践事例に、1（「実践論文目録」の番号による。以下同じ。）、池田恭仁子の「生徒の季節感とそのとらえ方—『枕草子・春は曙の段』学習指導をとおして—」とする報告がある（注4）。池田恭仁子は、高等学校における古典学習指導のあり方を、「根本的には、自分たちが受け継いできた日本人の文化を理解すること—風土に結びついて育てられた独自のものの見方・考え方・生き方を知ること—が考えられる」（注5）として学習指導を進めた。対象生徒は51名、指導期間は1958年12月から1959年1月、教材は第1段：春は曙、第21段：すさまじきもの、第35段：木の花は、第166段：野分のまたの日、第261段：雪いと高うであった。報告は、初段についてのみ行われている。初段の指導の眼目は、原文のよさをとらえることとし、①作者清少納言の持つ季節感とそれに伴って現れる個性

的なものの思い方、②文章の簡潔性・論理性を取り上げ、「できるだけ原文を生徒自身が持っている感覚やことばへ近づけていく方法」をとったと述べている。初段の読解がどのようになされたかは記述がないが、初段の読了後、「生徒にも同じ気持ちでこのような文章を書いてみるよう指示」（以上、注6）を行い、冬休みの課題として原稿用紙1枚以上で提出を求めた。提出された原稿から4編をプリントし、内1編（0女子）を授業の話し合いに用いている。0女子は、春は夜、夏は朝、秋は夕方、冬は昼とし、その内、春については、

春は夜。

月夜に外へ出て空をながめると、薄緑の空がぼんやりとかすんで見える。その薄いたれぎぬを通してタマゴ色の月がぽっかりと一つ。その月の光が、ほの白く地上を照らすと、しんとして声のないこの世界から、一足跳びに昔懐かしい奈良・平安朝の世界に帰ったような気がする。人里離れた山奥の竹藪に囲まれた家で、静かに琴の音を聞くような、そんな懐かしい空である。（以下略—渡辺）

（池田恭仁子「生徒の季節感とそのとらえ方—『枕草子・春は曙の段』学習指導をとおして—」『国語教育研究』創刊号 1960年2月 広島大学教育学部光葉会刊 58頁）

と書いている。報告では、この1編を中心に生徒の作品と初段との比較を「主題・構想（素材から）・表現について」（注7）行っている。目標の達成に関する言及はない。

この実践は、『枕草子』に「自分たちが受け継いできた日本人の文化」があるものとし、その理解を目標として教師主導の学習指導を行うとともに、発展として創造的表現に結びつけているところに特色が見いだされる。

## 2 『枕草子』学習指導の出発（1970—1977年）

1970年に高等学校学習指導要領が改訂され、能力主義に立ち、古典教育を充実させる方向が打ち出された。

1974年8月には、『〈教え方叢書〉古典の教え方（第二巻）日記・紀行・随筆編』（注8）が刊行された。ここには、2. 影山美知子「『枕草子』〈春はあけぼの〉教材の扱い方と実践授業の展開」、3. 吉田一恵「同〈すさまじきもの〉」、4. 渡辺英二「同〈宮にはじめてまゐりたるころ〉」の3編が掲載され、ともに教材研究と授業の詳細な記録が載せられている。いずれも読解型の授業を展開している実践例である。

渡辺英二は、高等学校における「古典」（古文）学習には、「語学的学習」と「文学的学習」とがあるとする。「前者は、古文の正確な読解力、作品の理解・享受を旨とする基礎力

の養成であって、語彙、語法がその中心」となり、「既習の語学的知識をもって文章読解の武器とし、更に高度な語学的知識を習得することが目標」となるとしている。「後者は、鑑賞、分析、批評という作品の全的理解」であり、「語学的知識に寄り掛かりながら、その作品の主題を明確にし、文学史上の価値を位置づけることが目標」となるとした。古文の学習は、「語学的学習」と「文学的学習」が相俟って完成するとしている（以上、注9）。前者に偏った授業は反省しなければならぬとも記している。

渡辺英二は、「宮にはじめてまゐりたるころ」の指導目標として、①「あの清少納言にして、なぜこんな初々しい態度をとるのかと、一瞬読むものの目を疑わしめる本段の内容、いわばその特異性を、まずしっかり理解させること」と②「清少納言における宮廷生活の意味、変貌の姿の幾分なりとも生徒に知らしめること」（以上、注10）を挙げている。対象生徒は、私立女子高等学校3年、クラス54名である。補助教材として、①生徒が第一、二学年で学習した『枕草子』各段の冒頭部を引用したもの、②枕草子関係年表、③『紫式部日記』中の清少納言評、④道隆、道長、一条帝を中心とした系図を準備した。生徒は、予習として、①本文書写、②語釈、③通釈（可能な範囲）、④音読、⑤文末語―述語への留意が課されている。

指導計画は、言語要素の指導、段落分け指導を省けば、次の通りである。

- 第一時 既習教材による「清少納言の人間像」の確認、文学的知識の整理（教師）
  - 第二時 宮仕え当初の清少納言について、定子中宮と清少納言との交流について、定子中宮と伊周、それに清少納言について
  - 第三時 定子と伊周と清少納言について、定子と伊周と道隆、それに清少納言について、定子と清少納言との交流について
  - 第四時 定子と清少納言との交流について
  - 第五時 「清少納言の人間像」の再認識、全体的感想、枕草子について（教師）
- （渡辺英二『「枕草子」〈宮にはじめてまゐりたるころ〉教材の研究と実践授業の展開 宮崎健三・野地潤家・石井茂編著『〈教え方叢書〉古典の教え方（第二巻）日記・紀行・随筆編』1974年8月 右文書院刊 108・109頁参照）

第二時の授業の一部は、次のとおりであった。

- T さて、それでは、今日はいよいよ第一段落の本題ともいえるべき問題、宮仕えし始めた頃の清少納言はどういう女性であったか、という点について見ていくことにしよう。（中略―渡辺）この一八四段での清少納言は、どんな感じがしたか、発表してもらいましょう。どうです、Oさん。

S そうですね。とても若々しくて、と言うより、まるで私達ぐらいの年で、たとえば高校出たばかりのOLのような、物慣れない、内気で、気が弱くて、……。恥ずかしがりやで。ともかく、おどおどしています。

T そう。みんなおそらく、そんな感じがしたんじゃないかと思いますが……。  
(一同、うなづく。)

ところで、そんな感じはどこからくるのかな。どんな表現から。文中で、そんな印象を与える部分は、どこのところだろう。さあ、Oさんどう。

S たとえば、「もののはづかしきことの数知らず」とか、「手にてもえさし出づまじうわりなし」とか。それに、「念じて見などす」とか、「なほ伏したれば」とか。

T ほかに、誰か。

S 「夜夜まゐりて」とか「御几張のうしろにさぶらふ」とか。「いかでかはすぢかひ御覧ぜられん」もそうです。

T そう、そんなところでいいでしょう。(中略—渡辺)

ところで、今指摘してもらった表現は、それぞれ清少納言の恥ずかしい気持、物慣れない態度、初心な様子を表しているんですが、表現の仕方がちょっと違いますね。二種類あるんだが、その違い分かるかな。どう？(中略—渡辺)

動詞—誰か(その動詞の主体にあたる人)の動作を表す。

形容詞—誰か(その形容詞の主体にあたる人)に対する表現者の批評や感想・心理を表す。

(渡辺英二『枕草子』〈宮にはじめてまゐりたるころ〉教材の研究と実践授業の展開 121・122頁)

本実践では、「古文の正確な読解力」と「作品の主題を明確にし、文学史上の価値を位置づけること」が追究すべき古典学習指導の目標とされている。徹底した教師主導の授業が行われ、生徒の興味・関心に対する配慮は乏しい。表現を押さえた読解が丁寧になされ、内容把握に有効な方法として、動詞・形容詞の働きの違いに関する指導もなされている。この授業について渡辺英二は、「毎時間、まず語学的説明をし、次に内容に触れるという二段構えの繰り返しであるが、どうも語学的説明により重点が置かれてしまうようだ。あるいは、語彙語法については特に詳しく触れないで、専ら内容の追究・把握を中心にして授業を展開していくほうが、より効果的であるかもしれない。ただ、この一八四段の場合、語学上の障害があまりに多すぎるようなので、今のままでは、生徒に与える印象が希薄になるのではないかと恐れる。」(注11)と反省している。本実践には、能力主義に結ぶ「語

学的学習」への傾斜が見いだされる。

### 3 『枕草子』学習指導の展開（1978—1988年）

1978年の学習指導要領の改訂は、ゆとりと充実を求めるものであった。この改訂によって、古典は「国語Ⅰ・Ⅱ」に統合され、選択科目として「古典」が加えられるに至った。ここに来て、古典教育は新たな方向を模索することになっていった。

5. 世羅博昭は、「個々の生徒に即応した学習指導を求めて—『枕草子』の学習指導における一つの試み—」（注12）を発表した。世羅博昭は、「生きた国語教室の創造」（注13）を求め、『枕草子』をとりあげて、同一教材を一斉学習で読み取った後、生徒ひとりひとりに、自分の興味や関心に応じて自由に教材を選ばせて、読みひろげ・発展学習の一環として、個別学習をさせるやり方」（以上、注14）を追究する授業を試みた。

対象生徒は普通科2年生、時期は1977年度2学期であった。指導目標は、次の通りである。

- ①「枕草子」を読んで、清少納言のものの見方・感じ方をとらえさせるとともに、それに対する生徒自身の考えを持たせる。②心情語、助動詞、助詞、敬語などに着目することによって、文章を読み取る力をつけさせる。③「枕草子」の文体の特色をとらえ、そのすばらしさを味わわせる。④生徒ひとりひとりが個別に課題を持って学習する力を育てるとともに、古典に親しむ態度を養わせる。（「個々の生徒に即応した学習指導を求めて—『枕草子』の学習指導における一つの試み—」『研究紀要』第3号 1978年3月 広島県立安古市高等学校刊 165・166頁）

教材は、次の通りであった。

#### I 同一教材・一斉学習（授業の中で）

（1）〈自然観照〉作者の自然観をとらえさせる。

①総括的に・・・第一段「春はあけぼの」

②個別的に・・・（夏）第二二三段「五月ばかりなど山里にありく」

（秋）第一三〇段「九月ばかり、夜一夜降りあかしつる雨の」

（冬）第一八一段「雪のいと高うはあらで、うすらかに降りたる」

（2）〈ものづくし〉作者のさまざまな「もの」に対する見方・感じ方をとらえさせる。

①客観的・具象的に存在する「もの」・・・第四三段「虫は」



②主観的・抽象的に存在する「もの」・第四二段「あてなるもの」

第七五段「ありがたきもの」

(3)〈宮廷生活〉自伝的な部分を読んで、作者のものの見方・感じ方をとらえさせる。

①第一二九段「関白殿、黒戸より」

②第一三七段「五月ばかり、月もなう」

③第二九九段「雪のいと高う降りたるを」

(4)〈人生評論〉作者の人生に対する考えの一端をとらえさせる。

第二六九段「よろづのことよりも情けあるこそ」

## II 自由選択教材・個別学習（授業の外で）

主観的・抽象的に存在する「ものづくし」の段、全七五段の題目列举。生徒は興味・関心に応じて一章段を自由に選び、その段に見られる作者のものの見方・感じ方をとらえさせるとともに、それに対する生徒自身の考えを持たせる。

（世羅博昭「個々の生徒に即応した学習指導を求めて」 166・167頁参照）

学習指導の概略を、次に整理して掲げる。

- 1 導入 学習目標提示、『枕草子』と作者、学習の進め方について説明（1時間）。
- 2 作者の自然観をとらえる学習（6時間）
- 3 作者のさまざまな「もの」に対する見方・感じ方をとらえる学習（3.5時間）
- 4 自伝的な部分を読み、作者のものの見方・感じ方をとらえる学習（4.5時間）
- 5 作者の人生に対する考えの一端をとらえる学習（1時間）
- 6 自分の選んだ段の感想文の書き方の学習（1時間）
- 7 個別学習（授業外一助言メモをもとに休憩時間、放課後を利用して指導）

個別学習に関する反省と課題が、次のように述べられている（注15）。①生徒の興味・関心に基づく教材の自由選択は生徒の学習意欲を高める。②「他の生徒の意見を聞く場」、すなわち学習の交流の場を設定することが求められる。③自由選択教材（題名のみを与え、本文は選択した生徒自身が手に入れるという方法）の教材化の工夫、また、作業、内容理解、感想の書き方に関する「学習の手引き」の作成が望まれる。④個別学習は優劣を感じさせない伸び伸びと学習させる理想的な方法である。⑤個別学習を、Ⅰ同一教材・一斉学習、Ⅱ自由選択教材・個別学習、Ⅲまとめ・読み広げの学習・一斉学習と指導過程に組み入れ、授業時間内にすべきであった。⑥同一教材における個別学習に関する研究も必要である。⑦生徒の自己変容を自己評価させればよかった。成長の喜びは次の創造への意欲となる。

世羅博昭は、清少納言のものの見方・感じ方をとらえさせ、生徒自身の考えを持たせることを価値目標として学習指導を展開した。生徒の興味・関心を学習成立の基盤に位置づけ、基礎（一斉）→発展（個別）を指導過程に位置づけ、『枕草子』の章段の特性と生徒の興味・関心に応じた教材開発を行い、個に応じた教材選択を行わせ、学習の手引きを用いて生徒の主体的学習を導き、表現と理解を関連させて理解を深め、生徒自らに考えを持たせる指導を展開した。ここに本実践の特色を見いだすことができる。

6. 大崎康子は、『枕草子』の大主題を「自由な連想作用」とする「萩谷氏の解釈に導かれて、作者の心の動きを追ってみると、思いがけない発見がある。」（注16）と述べる。そのようにして得た発見については、「自然描写の鋭さを言うにとどまっていたこの作品の中で、人間についての洞察の深さを随所に見いだすことができた。」と記し、「ここに示された女から男への、さらには人間そのものへの洞察を、生徒に紹介しようと考えた。」（注17）と学習指導への思いに重ねて述べている。教材は、「ふと心劣りするものかは」（一九五段）、「世の中になほいと心憂きものは」（二六七段）、「御前にて人々とも」（二七七段）、他九段が「古典Ⅱの教材となっているもの、入試問題として頻度の高いものの中から」（注18）教材化されている。

授業については、「講義にしたり、演習にしたりしながら基礎読みをし、読み深めの過程で、表現の内実にとらえようと試みた。作品への教師の評価は、そのまま生徒にはねかえる。教師にとって真に『古典』たり得る時、作品は教室で光りだす」（注19）とされている。「御前にて人々とも」の授業の深まりについて、次のように述べている。

教室はここでひとつの高みへ導かれた。私達が「生きている」ことの中にも、清少納言が示したような転生の契機は、はらまれているのではないか。閉塞感、脱落感も、決して珍しくなく、日々そうした思いとのこぜり合いの如き様相もあるのだけれど、私達は、自らが美と感じ得る物、例えば、ある日の青い空や、風にゆれる花々や、あるいは一節のメロディーや、あるいは真珠の輝きによって、ふと、生へと引き戻されるという経験を共有し得る。その共生の思いは、千年の隔たりを越えて、清少納言をわれらの友として感じさせる。

さらに、彼女が、なぜ「紙の白さ」に魅せられたのか、その心理の背景には、「その紙にことばを書き付ける楽しみ」が、ひそんでいたと考えられる。「書く楽しみ」が、「慰め」になる心の在りようへ、つまりは、「表現すること」の、人間にとっての意味へと、私達は誘われる。また一方、「白」という色が、日本文学の中でどういう美意識と結びついているか、というのも興味のあるテーマで、例えば、芭蕉の句にお

ける「白」の効果など、たどってみたい気がする。教室では、室生犀星の「日本美論」（夕映 梅花）の中にある、「紙」を紹介して、文学研究への誘い水とした。（大崎康子「『古典』を読む―『枕草子』の場合―」『国語教育研究』26号 1980年11月 広島大学教育学部光葉会刊 220・221頁）

ひとりの生徒は、次のような考えを述べている。

その限りにおいては、わかるような気もするのだけれど、例えば紙そのものに限定して考えてみると、様子はかなり違ってきている。私たちのまわりに紙はあふれ、毎日、大量の紙に追いまくられて生きている。私達は、「紙の白さのもつ美」を見いだす余裕など、とっくに失ってしまった。千年前、清少納言を生へと引き戻した「白い紙」は、今や私達を焦燥感へと追い込む。物のあふれる中で、物そのものの価値を見失ってしまった私達の状況は、例えば、安部公房の「自分の名刺」に取って代わられる主人公にそっくりなのではないか。「物」を見失ってしまった私達は、自分も含めて「人間」そのものをも見失っている。現代を生きる私達が、脱落感から生へと引き戻される契機を見いだすことは、よほど困難である。けれど、例えばこういう現代の状況を「壁」として認識し、その中に在る人間の存在の虚しさを、ユーモアさへ伴って虚構化し、表現する力が人間にある限り、「この世はまだ生きているに値する」のではないと思うのである。T・N 女子（大崎康子「『古典』を読む―『枕草子』の場合―」 221頁）

大崎康子は、この生徒の文章に対し、「丁度、現代国語の授業で読んでいた安部公房の現状認識へつなげて、自分なりの読みを示してきた」とし、「ひとつの古典を読み深めることによって、時代を越えて共通する人間の本質への認識を深め、さらには、作者の生きた時代と現代の相違に思い至り、千年の時間を貫いてくる光に照らし出される現代の特質を把握する時、私達は、この喧噪と退廃の中であって、目覚めて在ることができる。」（注20）と説いている。

大崎康子は、「作品への教師の評価は、そのまま生徒にはねかえる。教師にとって真に『古典』たり得る時、作品は教室で光りだす」とし、教師主導の指導を展開し、生徒の深い理解をもたらした。生徒の感想と関連させ、「千年の時間を貫いてくる光に照らし出される現代の特質を把握する時、私達は、この喧噪と退廃の中であって、目覚めて在ることができる。」と述べているところに、古典の内在的価値を認める古典観が見いだされる。

7. 稲益俊男は、日記回想的章段「大進生昌が家に」を教材として授業を行った（注21）。

「大進生昌が家に」については、これまでの研究を踏まえ、「この章段は愚直な生昌の言動を表すことにあるのではなく、中宮定子を賛美することにある」とし、また、「政治的な逆境におかれた不遇な中宮に、世評を無視して献身的に奉仕した生昌に対して、親愛と感謝の情を寄せてこの章段を書いた」とする見解を挙げている。その上で、授業の留意点として、「生徒の多くは、おそらく生昌という愚直な人物の言動をからかったものとして、清少納言に反発し、嫌悪の情を抱く者もいるであろう。主題に迫るためには、解釈の過程において中宮定子の言動についての叙述が文章構造の上でどのような一を占めているかについて、特に注意させる必要がある」（以上、注22）と述べている。対象は3学年、指導のねらいについては、「解釈力をさらに伸ばすとともに、それを基礎に形象を正しく把握し、文学として『枕草子』を享受させることを主眼とした。特に本章段では、文章の叙述や構想に則して中宮賛美という主題をどのように読み取らせるかということに重点をおいた。」（注23）とされている。指導過程は、1 文章を読む（教師の範読・生徒の朗読）、2 予備知識としての背景説明、3 各節を読む、4 感想文を書くであった。第3節の指導は、次のようであった。

童女の装束と脩子内親王の食器をめぐる生昌の言葉が笑いの種となる。

- ①「柏の上襲は何の色にかつかうまつるべき。」と申すを、また笑ふもことわりなり。

\*汗疹と言えよいに柏の上襲といった生昌の知識のなさを笑ったものである。

- ②「姫宮の御前の物は、～ちうせい折敷にちうせい高坏などこそよくはべらめ。」と申す。

\*ちうせいはちいさきのなまりとも、文章生出身である生昌が、漢語「中勢」を使ったのだとも言う。笑われても真面目に事にあたろうとする生昌の実直さに注意させたい。

- ③「さてこそは、上襲着たらむ童も、参りよからめ。」と言ふ

\*生昌が実直であるからこそ、女房たちの笑いの対象となっているのである。

- D「例の人のやうに、これなかな言ひ笑ひそ。いときんこうなるものを。」と、いとほしがらせたまふもをかし。

\*中宮の生昌庇護の情が、さらに直接的、具体的に表現されている。中宮は生昌が謹厚なるものであるが故に笑ひ者にされていることを踏まえて、女房たちをたしなめているのである。作者は二節Cでは単に笑はせたまふとだけしか述べていなかったが、ここではいとほしがらせたまふ中宮を、作者がをかしと賞賛していることに気づかせたい。（「枕草子『大進生昌が家に』を読む―古典教育の課題と方法―」『日本文学』第30巻2月号 1981年2月 日本文学協会刊 47頁）

この章段に関する感想文の一部を、次に掲げる。

(B) (前略—渡辺) たとえば、この「大進生昌」にしても、彼女は人のいい生昌を、いいようにならなくて面白がっています。清少納言にしてみれば、自分よりすぐれた才能の持ち主でないと、真剣になれないのかもしれませんが。けれども、頭ごなしにして人をからかうという彼女の性格、私は好きになれません。(後略—渡辺)

(D) この段は、全体的に見て、作者である清少納言が、大進生昌をからかっていることを書いたもので、彼を優しくかばおうとする中宮定子の思いやりなどがうまく表現されている。からかうにしても、作者は生昌に対して、この男はこのようにことで決して動じないという安心感や信頼感を持って、からかったに違いない。(後略)

「4」で書かせた感想文については、「二つの傾向が見られる。愚直な生昌の行動を描いたものとするものと、それに中宮賛美の視点とをあわせてとらえたものである。後者もそれほど明確なものではなく、未分化の状態と言った方が適切であるかもしれない。」とし、「作者は確かに生昌の言動を描きこれを笑いの対象にしているのだから」、前者の「主題の取り方を誤りとは言えない」とした。その上で、主題を「中宮賛美」にあると狭く考えたならば、今回の指導は十分なものではなかったということになる(以上、注24)と反省している。

本実践は、解釈力をさらに伸ばすとともに、それを基礎に形象を正しく把握し、文学として『枕草子』を享受させることを主眼としたとされる。ここでは、背景的知識を与えた日記章段の読みが提示されている。本実践は教師主導による訓詁注釈的、読解的授業となっている。指導の実際では、指導すべき主題と生徒の読みにずれが生じるに至り、形象把握とそれに対する意味付けの問題が課題になっている。

13. 伊東武雄は、1984年度、二学年二学期、普通科5クラスを対象に『枕草子』の学習指導を行った(注25)。留意点は、①意欲的に興味を持って書くことを通して、読解、鑑賞を深めるのに役立て、ものの考え方や感じ方を深める、②生徒が書いたものはできるだけ教材として活用するという二点である。ねらいは、①清少納言のものの感じ方と鋭さと発想の豊かさを理解し、感受力を育てる、②枕草子の文章に学び、生き生きと簡潔に文章を書く、③友人のものの感じ方、考え方を知り、自己の書くことに役立てるという3点である。授業は、①藤原与一による読解の三段階法のうち、素材読みを中心とした作品の読解、②各段の練習プリントによる練習問題の解明、③短作文の作成・検討と進め、授業終了後に配布教材、練習問題、生徒作品を集め「枕草子を読む」と題する計34頁の文集を作

成した。学習指導は、次のように展開した。

(一)「春はあけぼの」(序段)→「私の好きな季節」

すきな季節一つをとりあげて、生き生きとしたリズム感のある文章を書く。

(二)「うつくしきもの」(146段)→「うつくしいもの」

現在で美しいと思うもの(かわいらしいものでなくてもよい)をとりあげて、自己の考えをまとめる。

(三)「香炉峯の雪」(283段)→「清少納言という人」

臨機応変にとっさに判断し行動できる清少納言という人物を理解し、中宮定子とのかかわりを考えて、その人物像を記す。

(四)「五月ばかり山里にありく」(210段)→「十月修学旅行に行く」

修学旅行の感動を生き生きとして短文をつみ重ねて書く。

(五)「虫は」(41段)「〇〇は」―「わたしたちのものはづけ」―

自分にとって興味関心のあるものをとりあげて、類集的に書く。列挙法を用いながら変化をもたせる。(伊東武雄「古典学習における短作文学習の試み―枕草子学習指導の場合―」『高校古典教育の考究』1992年12月 溪水社刊 113・114頁)

授業の実際については、言及が無い。授業終了時に「枕草子を学習して」とする150字の感想文を提出させている。一人の生徒は、「印象は、季節についてよく受け取っていてすばらしい感覚をしていると思った。目の前に浮かぶ感じがした。とくに、「秋は夕暮れ」がすきで心に残った。「うつくしきもの」・「香炉峯の雪」・「虫は」も目の前に浮かんですきだった。清少納言も、すごい才能のある人で、わけてほしいと思った。」(注26)と書いた。

本実践は、『枕草子』の発想と文体に学び、ねらいの「②」に関わる発展的学習として創造的表現に取り組ませた実践である。藤原与一の素材読みを実践する(内実は不明)とともに、理解と表現を関連させ、生徒の表現の教材化により表現の交流を図り、興味・関心を引き出しつつ、内容理解を深めた。また、学習の成果を冊子にすることにより学習を振り返らせ、達成感を持たせようとしたところに特色が見いだされる。留意点としてあげられている「書くことを通して、読解、鑑賞を深める」ためには、生徒の表現と『枕草子』の章段とを比べるなど、『枕草子』を見つめ直させる指導過程の工夫が授業に必要である。

9. 森本真幸は、「季節の認識を啓く『春はあけぼの』―ウォークマン世代の可能性―」(注27)を報告した。森本真幸は、古典離れ、古文嫌いの原因を、ア. 古典との接点が少なくなった社会状況、イ. 自閉性とながら性を特徴とし、主体的に学習できない若い世代

の状況、ウ、生徒の読みも教師の読みも存在しない、中心は文法と現代語訳と教科書の設問の解答におわる古典の授業に認めた。森本真幸は、「精選された古典の中から、文学的にもすぐれた、核と言うべき作品を選び、生徒に本格的な読みを体験させる必要がある」とし、「現在の細切れ的で網羅的な授業方法を改め」、「訓詁注釈を超えた、生徒の物の見方生き方にかかわるような授業」を行おうとした。『枕草子』の授業では、初段を「文学的にもすぐれた、核と言うべき」「基本古典」として教材とした。初段については、「感性人間と言われる生徒に、『春はあけぼの』は、テーマ・文体・感受性などの点で、魅きつけ合うものがある」（以上、注28）とし、また、「構成の緻密さ、簡潔な的確さ、感性の豊かさ等が見られるだけでなく、古典的名文として古来愛誦されて来ただけに、規範たりうる」（注29）と述べている。「基本古典」を教材とした授業によって、「生徒の中に典型的な古典が蓄積され」「定着した文学的、言語的体験が多くの古典を読み広げて行くにあたっての手がかり」（注30）となることが求められた。

授業展開は、「1、各自が考えている好ましい季節（アンケート） 2、音読（斉読・グループ読みを中心に） 3、暗記・暗誦 4、逐語直訳（ノートに）・語意 5、文法（ノートに） 6、場面の特徴 7、イメージ化をはかるための現代語訳 8、共感する所としない所（アンケート） 9、現代人の認識、感性との相違（現代詩と比較） 10、中世人の認識、感性との相違（「徒然草」二〇段と比較） 11、清少納言の視点（「枕草子」二一段・八七段、『王朝びとの四季』を手がかりに） 12、表現読み（冬を中心に）、13、作文（「好ましい季節と情景」）」（注31）となっている。授業の実際には、最後に、初段を五段階評価させている。

森本真幸は、直読直解を有効性の高い方法として、「直読直解に進む過程として、厳密な逐語直訳と、構文面も十分に配慮した文法の学習が必要である。さらに、その時分の生活習慣や文化に対する理解と、作品の表現方法に即したイメージ化が必要となる。一方で、このような詳しい学習が行われ、他方で沢山の古典に（時には朗読と簡単な註だけで、時には現代語訳で）触れる中で、古典学力が養われるのである。」（注32）として、次の過程を考えた。①逐語直訳、②多義選択、③文法、④描写の特徴、⑤現代語訳とする過程である。これは、おおむね、授業展開の4・5・6・7に対応している。

また、『古典の読みの最終段階は、現代とのかかわりの中で古典をとらえ直すことであり、古典を歴史的な存在として認識することである。この場合、時代や文学史の流れを説明して作品の歴史的な位置づけを明らかにする科学的方法と、他の作品をとの対比の中で生徒に考えさせる文学的方法がある。」（注33）と述べ、本実践においては後者の方法をとったとある。授業展開の9・10・11がそれに当たり、A、宮廷女房としての清少納言の視野（『枕草子』二一段、八七段）、B、「徒然草」（二〇段）の季節感との対比、C、現代詩と

の比較（坂本遼「春」、大関松三郎「虫けら」、黒田三郎「夕焼け」、草野心平「秋の夜の会話」、金子光治「雪」）という点から取り扱っている。

生徒の一人は、次のように書いている。

「夕焼け」

枕草子は、あわれな描写をしていてもおもしろさを感じるが、詩の方はそのまま哀しく伝わってくる。決して枕草子の全てに共感するわけではないが、やはり『哀』よりも『楽』だろう。それになぜか詩より古い枕草子の方に現代に生きている自分が感動するのは不思議だ。

両方とも部分的には書かないが全体を見て前記のような感想になった。そして同じ秋の動きでも静かさの動と風の音・虫の音などの動との違いも感じられた。（H・M）  
（森本真幸「季節の認識を啓く『春はあけぼの』—ウォークマン世代の可能性—」『日本文学』33巻 1984年8月 60頁）

生徒が古典を現代からどのようにとらえ直し、歴史的な存在として認識したかについては、なお明らかではない。

#### 4 『枕草子』学習指導の発展（1989—1998年）

1989年の学習指導要領の改訂において、古典は、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」に統合されるとともに、選択科目として「古典Ⅰ」・「古典Ⅱ」・「古典講読」が新設された。国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度を育成することが古典教育に期待され、古典教育の充実が求められた。

10. 牧本千雅子は、高等学校一、二学年での国語Ⅰ・Ⅱの学習を通して、代表的な古典文学をある程度読んできた高校三年生に、平成三年度の一学期の古典演習の講座で、「雪」や「月」などの自然の叙述から、王朝人の愛と美のかたちを探らせる単元学習を試みた（注34）。この中で、言語活動面では、読み、書き、聞き、話す、言語事項を理解するという通常の学習に、意識して、読み比べる、考える、見つめる、文献を探索する、教室外に出かけて調べる、味わい楽しむといった方向性を組み入れた。また、個別（グループ）の研究課題を見つけ、教室学習と同時進行で組み込ませ、レポートとして提出させた（注35）。

最初に単元の趣旨を説明し、個別の研究課題の設定と取り組みを表示した後、単元は次のとおりに進められた。

1次 『伊勢物語』の「露」を形象化した段を読み、王朝人の愛とみやびのありようを探



らせる。教材は、『伊勢物語』6段、87段、塚本邦雄の『露とこたえて一葉平朝臣歌物語』。

2次 『蜻蛉日記』を読み、「かげろふ」に属した身の上と心理を読みとり、王朝人の愛のかたちを見つめさせる。

3次 『枕草子』を読んで、宮仕え中の出来事と心情を読み取るとともに、『枕草子』における「雪」の記述を調べ、清少納言の美意識をとらえさせる。

4次 『和泉式部日記』を読んで、「月」をめぐる宮と女の行動と心理を読み取るとともに、「をり」に即した贈歌と消息文の応答の機微を味わわせる。また、同時代の女流作家による和泉式部評（『紫式部日記』）について考えさせる。

5次 『源氏物語』の「須磨」「若菜上の一節」を読んで、登場人物の境遇、心情を読み取るとともに、「衣の色」の表現を調べ、王朝人の色彩感覚について考えさせる。

第3次の『枕草子』の展開は、①第一七九段（「雪のいと高うはあらで・・・」）を読み、雪の夜、気の合う女房同士、雪明かりの中でおしゃべりをしていた場面の状況、心情、美意識をとらえさせる、②第二八二段（「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて・・・」）を読み、雪を賞美する態度について、おもしろさを味わわせる、③『枕草子』の他の章段から、「雪」の叙述を探させ、清少納言と雪のかかわり、雪の描写を通しての美意識について調べ、考えさせる。調べてきた『枕草子』の中の「雪」の叙述とその情趣について、次の段章段を基に発表がなされた。取り上げられた章段は、第1段、第3段、第40段、第102段、第177段、第179段、第235段、第276段、第278であった。発表の後、整理して、「雪は彼女の生涯に縁深いものであり、雪の記述と冴え冴えとしている。敬愛する中宮定子や憧れの上流貴族の社交の場である宮廷サロンで、みずみずしい感性を知性に働かせ、注目を集めた清女が好んだものとして、純白清澄、高貴な白雪は、似つかわしい。」（注36）とまとめた。『枕草子』を研究課題にした生徒のレポートの項目のみを掲げれば、次のとおりである。

『枕草子』でみる清少納言（T・Y女）

1 中宮定子と清少納言の文学的趣味の一致

2 清少納言の宮仕え観

3 女性としての清少納言

4 清少納言と自然

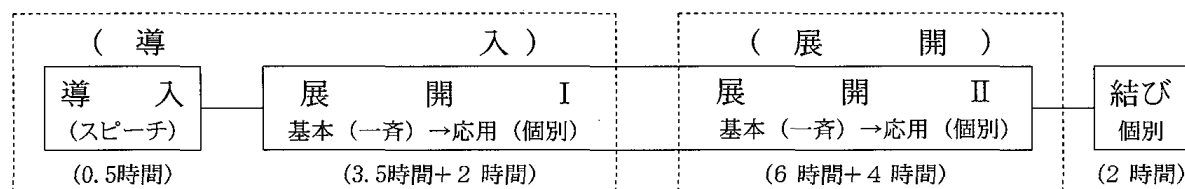
有明月（三六段、一七九段、二五三段）、月のあかき状態（四五段）

雨（二五段、二九段、三〇段） 五月の長雨の情趣（二一段）

5 清少納言の連想と機知（牧本千雅子「単元『王朝人の愛と美のかたちを探る』—『枕草子』を中心に—」日本国語教育学会（倉澤栄吉）編著『ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開Ⅳ 高等学校編』1990年8月 東洋館出版刊 106頁参照）

14. 渡辺春美は、古典の授業の活性化、すなわち、「①生徒が意欲的に学習の場に参加し、各自がいきいきと活動し発言し、聴き合うという具体的な学習活動を通して理解（感動）を深め、充実感、達成感を持つことのできる授業、②授業における一連の学習の過程によって、生徒一人ひとりが国語の力を身につけ、自立した学び手として育っていく授業」（注37）を求めて『枕草子』の授業を試みた。学習指導のあたっては、①興味関心の喚起—五つのスピーチ、②基本→応用を軸とした指導過程、③学習の手引き—小論文の書き方、④章段（ア．類聚・イ．日記・ウ．随想）の性格に合わせた読みの試み、⑤古典を読む力の育成を主な工夫として取り組んだ（注38）。

指導時期は1994年2学期、対象は3年生2クラスである。指導目標は、次の通りである。  
 価値目標—①『枕草子』を、その章段の性格に合わせ、読み味わわせる。②清少納言のものの見方・感じ方・考え方を理解するとともに、各自のものの見方・感じ方・考え方に広がりとし深まりを持たせる。技能目標—③比較・分析による読み、背景（歴史的・文化的背景）を考慮した読みができるようにする。④理解した内容や各自の考えを、目的に応じて表現できるようにする。態度目標—⑤主体的・積極的に古典の学習に取り組む姿勢を養う。⑥清少納言と枕草子に興味・関心をもたせ、古典を楽しく読もうとする態度を養う（注39）。  
 指導過程は、次のとおりである。



- ①導 入 清少納言は新しい女性、紫式部の清少納言観など五つの清少納言に関する5分程度の話をし、生徒はメモする。
- ②展開 I 「にくきもの」（26段）を基本段階（一斉学習）として読みの方法（分析・比較）を学び、その他の類聚章段の題名から一つを選び、それを題名として「私たちのものづくり」を書き、その後で章段を読み、比較する。
- ③展開 II 一斉学習として、「関白殿黒戸より」（日記的章段 124段）、「鳥は」（類聚的章段 39段）、「男こそ、なほいとありがたく」（随想的章段 252段）を読み、章段に応じた読みの方法を学ぶ。ついで、応用として班別学習で各種章段に応じた読みの方法で読み、まとめて発表する。まとめは、ア．章段の要約、イ．文法・語句の意味、ウ．参考（背景の説明）、エ．清少納言の見方・感じ方・考え方にしたがって行った。
- ④結 び 小論文の手引き（枠組み作文）により、清少納言の人物像を小論文にまとめ

る。また、学習の記録を冊子にする。

古典を読む力の育成は、各学習活動ごとに目ざされている。例えば、「展開Ⅰ」では、ア. 作品のあらすじをとらえ、構成を読み取る力、イ. 作品を通して、作者のものの見方・感じ方・考え方などを読み取る力、ウ. 文体の特色や表現のうまみを感じ得る力等の育成が図られている。

15. 渡辺春美は1998年10月に、「古典の授業活性化の試み—表現を軸とした『枕草子』の学習指導—」（注40）を発表した。ここでは、高等学校1年生を対象に『枕草子』入門として1996年3学期に9時間をかけ、授業の活性化を求めて学習指導を実践した。目標は、次の通りであった（注41）。①清少納言のものの見方、感じ方、ユーモアや機知を理解させるとともに人物像について考えさせる。②さまざまな表現活動をとおして、作品や清少納言への理解を深めるとともに、自己の考えを確かめたり、深めたり広げたりさせる。③形容詞・形容動詞・助動詞・掛詞・縁語について、表現の実際をとらえて理解させる。④『枕草子』と清少納言への興味・関心を高め、進んで学ぼうとする態度を養う。授業の工夫は、①表現を軸とした展開（理解の深化と対話交流のために）、②教材の開発（『枕草子』入門のための教材化、生徒の表現の教材化）、③基本→発展を取り入れた指導過程（生徒の基本を押さえた、積極的、主体的学習のために）、④章段の性格に合わせた学習（類聚章段・日記的章段・随想的章段のそれぞれに合わせた学習）、⑤学習の成果の集積（学習の振り返りと充実感・達成感を持たせるために）という5点であった（注42）。指導過程は、次の通りであった。

#### 1 『枕草子』—類聚章段を読む

①基本「うつくしきもの」（146段）→②応用「にくきもの」（25段）→③発展—私たちのものづくり（20の類聚章段の題目から一つを選択し、その題で「私たちのものづくり」を記述する。ついで、その題の章段の口語訳を行い、選んだ類聚章段と「私たちのものづくり」として書いた文章を比較し、気づきを書く。）

#### 2 『枕草子』—日記章段を読む

①基本「七日の日の若菜を」（127段）→②応用「二月つごもりころに」（102段）

#### 3 『枕草子』—随想章段を読む

①基本「生ひ先なく、まめやかに」（21段）→②応用「男こそ、なほいとありがたく」（250段）。①②を読んで、「女性（男性）と仕事」、「女性論（男性論）」について、「随想」、「清少納言への手紙」のどちらかの形式を選ばせ、意見を述べさせる。

#### 4 『枕草子』を学んで

『枕草子』で学習したことを振り返り、感想や意見を持たせる。①枕草子に学んで、②枕草子を読んで、③清少納言に思う、④その他から選ばせ表現させる。

## 5 『枕草子』冊子作り

一人の生徒は、学習の感想を、次のように書いた。

昔の人も今の人も考え方は似ているのだなぁと思った。「うれしきもの」でも手紙を継ぎ合わせて読めた時はとてもうれしいというのがあったけれど今の時代の私達でも共感できることが多かった。清少納言も私達とけっこう同じことを考え、仲の良い人と会話していたんじゃないかなあとなにかうれしいような気持ちになった。清少納言は身の回りで起こったほんのささいなことも見のがさずに書いているなあと考えた。そのちいさなことをまとめて書くのはやはり清少納言の気くばりや観察力や記憶力がすぐれていたからだと思う。せっかく同じ生きているのなら、いろんなこと、どんな小さなことにも目を向けて充実した生活を送りたいと思う。小さなことにうれしさや悲しさを見いだせる感情は大切だと枕草子を読んで思った。(SM女)

(渡辺春美「古典の授業活性化の試み—表現を軸とした『枕草子』の学習指導—」『和泉紀要』 1998年10月 大阪府立和泉高等学校刊 130頁)

## おわりに

便宜的に、1『枕草子』学習指導前史(1945～1969年)、2『枕草子』学習指導の出発(1970—1977年)、3『枕草子』学習指導の展開(1978—1988年)、4『枕草子』学習指導の発展(1989—1998年)に分けて、『枕草子』の学習指導の試行と軌跡を把握しようと試みた。

以上によれば、①、『枕草子』の学習指導は、類聚的章段の内容と文体的特徴を反映して、創造的表現を行わせる学習指導が試みられた。それは、学習者の主体的学習とも関連づけられた。また、創造的表現と原章段との比較を通して特色を見いださせる指導ともなった。

②. 随想的章段は、その内容理解をとおして清少納言のものの見方・感じ方・考え方をとらえる指導から、それを押さえた上で、学習者のものの見方・感じ方・考え方を問い、広げ、深める指導に展開する傾向が見いだされる。

③. 日記的章段の指導は、清少納言の人物像把握と結びつくが、類聚的章段、随想的章段に比べて、歴史的背景との関連、背景的知識の指導など指導方法に課題が残る。

④. 「1」・「2」期の教師主導の訓詁注釈的、読解的指導から、「3」・「4」期にな

ると、教師主導の読解指導とともに、学習者の興味・関心を学習の基盤に位置づけ、主体的学習を行わせる指導が見いだされ、その方法が次第に確立する傾向にある。

⑤、④に述べたことに重ね、「3」・「4」期になると、教材の開発（学習者の表現の教材化を含む）、学習者と教材との出会いへの配慮、学習の手引きの作成、基本（一斉）→応用（個別・班別）の指導過程、主体的学習を支える学習方法の指導、学習者の読みの交流による読み深め、学習の記録・冊子の作成などに工夫が見られるようになる。

⑥「4」期になると、単元学習が試みられるに至っている。

⑦上記変化は、規範としての古典観から「関係概念」としての古典観への移行によると推察するが、今後、さらに考察を深めたい。

注1 田中寛顕「枕草子—中学校教材を中心に—」（浜本純逸・松崎正治編『作品別 文学教育実践史事典 中学校・高等学校 第2集』1987年10月 明治図書刊）

注2 「関係概念」については、古典は、主体的に、ことばの契機をとおり、文学として機能させることで、現代を生き抜き、未来を開拓するエネルギーを得る時出現する、関係概念・機能概念とする、益田勝実氏の古典観によった（渡辺春美『古典教育論の研究—時枝誠記・荒木繁・益田勝実三氏を中心に—』2004年3月 溪水社刊 240・241頁 参照）。

注3 三田村雅子「解説—枕草子研究史—」（三田村雅子編『日本文学研究資料新集 4 枕草子・表現と構造』1994年7月15日 有精堂出版）

注4 池田恭仁子の「生徒の季節感とそのとらえ方—『枕草子・春は曙の段』学習指導をとおりて—」（『国語教育研究』創刊号 1960年2月 広島大学教育学部光葉会刊）

注5 注4に同じ（57・58頁）

注6 注4に同じ（58頁）

注7 注4に同じ（60頁）

注8 宮崎健三・野地潤家・石井茂編著『〈教え方叢書〉古典の教え方（第二巻）日記・紀行・随筆編』（1974年8月 右文書院刊）

注9 注8に同じ（103・104頁）

注10 注8に同じ（105頁）

注11 注8に同じ（135頁）

注12 世羅博昭「個々の生徒に即応した学習指導を求めて—『枕草子』の学習指導における一つの試み—」（『研究紀要』第3号 1978年3月 広島県立安古市高等学校刊）

注13 注12に同じ（165頁）

注14 注12に同じ（165頁）

注15 注12に同じ (185・186頁参照)

注16 大崎康子「『古典』を読む—『枕草子』の場合—」(『国語教育研究』1980年11月  
広島大学教育学部光葉会刊 215・216頁)

注17 注16に同じ (216頁)

注18 注16に同じ (215頁)

注19 注16に同じ (216頁)

注20 注16に同じ (221頁)

注21 稲益俊男「枕草子『大進生昌が家に』を読む—古典教育の課題と方法—」(『日本文学』第30巻2月号 1981年2月 日本文学協会刊)

注22 注21に同じ (44頁)

注23 注21に同じ (45頁)

注24 注21に同じ (50頁)

注25 伊東武雄「古典学習における短作文学習の試み—枕草子学習指導の場合—」(『高校古典教育の考究』1992年12月 溪水社刊)

注26 注25に同じ (129頁)

注27 森本真幸「季節の認識を啓く『春はあけぼの』—ウォークマン世代の可能性—」(『日本文学』33巻 1984年8月)

注28 注27に同じ (52頁)

注29 注27に同じ (55頁)

注30 注27に同じ (52頁)

注31 注27に同じ (52頁)

注32 注27に同じ (56頁)

注33 注27に同じ (58頁)

注34 牧本千雅子「単元『王朝人の愛と美のかたちを探る』—『枕草子』を中心に—」(日本国語教育学会編『ことばの学び手を育てる 国語単元学習の新展開』1992年8月 東洋館出版刊 96・97頁)

注35 注34に同じ (97頁)

注36 注34に同じ (105・106頁)

注37 渡辺春美「国語科授業活性化の試み—『枕草子』の学習指導の試み—」(『大下学園国語科教育研究会 研究紀要』32号 1996年3月 大下学園祇園高等学校刊 102頁)

注38 注37に同じ (102頁参照)

注39 注37に同じ (103頁)

注40 渡辺春美「古典の授業活性化の試み—表現を軸とした『枕草子』の学習指導—」

（『和泉紀要』1998年10月 大阪府立和泉高等学校刊）

注41 注40に同じ（106頁）

注42 注40に同じ（105・106頁参照）